

社会学部創設三〇周年記念講演会およびセミナーの報告：コルナイ博士を迎えて

MORITA, Tsuneo / モリタ, ツネオ / 盛田, 常夫

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会労働研究 / Society and Labour

(巻 / Volume)

30

(号 / Number)

1-2

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

6

(発行年 / Year)

1983-12-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00018291>

社会学部創設三〇周年記念講演会

およびセミナーの報告

——コルナイ博士を迎えて——

盛田 常夫

社会学部三〇周年記念行事のひとつとして、一〇月のロナルド・P・ドア氏に続き、国際的に著名なハンガリーの経済学者コルナイ・ヤーノシュ博士を招き、記念講演会と二つの国際セミナーを開催した。

コルナイ博士の業績については、すでに本誌第二九卷一・二号で紹介したが、いまま少し全体的なレビューで先の紹介を補足しておきたい。

コルナイ博士のこれまでの研究は、三つの峰をもっている。ハンガリー動乱直前に提出された博士候補論文「経済管理における過度の中央集権化」(一九五六年)は、国内でも大きなセンセーションを巻き起した。コルナイは、この論文で、過度の集権化が社会経済生活のあらゆる側面に有害な影響をもたらしていることを、繊維工業の具体的事例にもとづき論理的かつ実証的に明らかにした。ここでは、すでに、伝統的な中央集権的経済管理に垂直的意思決定関係が必然的に官僚主義的行動様式を産み出し、経済的・社会的人間関係を疎外していることが分析されている。二八歳の青年コルナイのこの著作は、一九五九年に Oxford University Press から英訳出版された。また、今年(一

九八三年）ハンガリーで出版されたハンガリー経済改革重要論文集のなかにも、この博士候補論文の核心的部分と審査委員会の報告が収録されている。

ハンガリー動乱以後、コルナイは数理経済学に転進した。この間の事情は詳らかでないが、思想上の対立をめぐる何らかの確執があったと思われる。しかしコルナイの才能はこの分野でも遺憾なく発揮された。コルナイは、有能な同僚数学者にも恵まれ、二段階・多段階の数理計画法の研究で成果をあげ、数理経済学者として知られるようになった。一九六七年に出版された *Mathematical Planning of Structural Decisions* (North-Holland) は、この間の著作を集大成したものである。しかし、何とんでも、西側の経済学界におけるコルナイの地歩を築いたのは、*Anti-Equilibrium* (North-Holland, 1971. 邦訳『反均衡の経済学』日本経済新聞社、一九七五年) である。この大著は新古典派数理経済学の根底的批判を目指したものであり、その代替理論のグラント・デザインを示したものであった。デビュー作が第一の峰とすれば、この著書はコルナイの経済学研究の第二の峰を築いたものといえる。多くの非マルクス経済学者は、現在でも、コルナイの主著を *Anti-Equilibrium* と考えている。しかし、これは彼の経済学形成のうえでひとつの通過点にすぎなかった。

一九七〇年代のコルナイの理論的関心は、現代社会主義経済メカニズムの記述的分析に移った。とくに、社会主義経済の共通現象である「不足」現象の再生産メカニズムに焦点を当てることによって、現代社会主義経済の分析体系を構築しようとしたのである。この着想は、『不足』(*Economics of Shortage*, North-Holland, 1980) と題する大著として結実した。欧文七〇〇ページを超えるこの著書は、現代社会主義経済の一般ミクロ分析と呼べるものであり、ケインズの『一般理論』に匹敵する著作といっても過言ではない。すなわち、ケインズが過剰経済の一般理論を提示

したとすれば、コルナイは過少Ⅱ不足経済の一般理論を提示したといえるのである。この著書は、したがって、コルナイの経済学研究の総決算であり、その頂点を極めたものである。

私がコルナイ経済学と命名しているのも、以上のような意味においてである。

さて、一九八三年一月一日に開催された記念講演会（九二〇番教室）には、東京大学の宇沢弘文教授にもご協力いただき、コルナイ博士のご紹介を伺った。宇沢教授は一九七七年の、またコルナイ博士は一九七八年の世界計量経済学会会長であり、両氏はいわば旧知の間柄である。本号にはこの両氏の講演記録を掲載した。すでにコルナイ博士の記念講演テキストは、『経済セミナー』一九八三年六月号に邦訳されている。この記念講演は社会学部の学問領域を念頭におかれて特別に準備されたもので、収斂概念の明瞭化と経済システムの多次的対照を提起したものである。続く一月一四日には、コルナイ博士の名著をテーマにしたセミナー「『不足の経済学』にかんする討論」が開催された。宇沢教授が座長の任を、また岩田昌征（北大）、久保庭真彰（一橋大）、高須賀義博（一橋大）、佐藤経明（横浜市大）、斎藤稔（本学経済学部）、永井進（本学経済学部）の各氏が討論者の任を引き受けられた。セミナーには、全国の大学・研究所から四〇余名の研究者が参加し、午前一〇時から午後の六時近くまで熱のこもった議論が展開された。セミナーでのコルナイ博士の二時間にわたる問題提起は、すでに『エコノミスト』一九八三年三月二九日号に掲載されている。

このセミナーの後、コルナイ博士は神戸大、阪大、京大、一橋大での講演・セミナー活動を続けられ、再度二月一日の法政国際セミナーに出席された。

「現代ハンガリーの経済と社会」と題する二月一日のセミナーには、五〇名を超える日本人研究者が参加し、五名

のハンガリー人研究者が報告をおこなった。カール・マルクス経済大学副学長で国際経済専攻のパランカイ・ティボウル(本学との交換協定にもとづいて来日)、同大学の数理経済学専攻の助教授であるモーツアル・ヨージェフ(文部省給費生)、科学アカデミー付属社会学研究所研究員のゲルゲイ・アッティラ(文部省給費生)、それにコルナイ夫妻である。残念ながら、コルナイ夫人で数理経済学者のダニエル・ジュジャは風邪による高熱のため参加できず、急遽夫君がピンチ・ヒッターになった。コルナイは午前中に夫人の「住宅不足と社会的不平等」と題する報告を手際よく紹介し、午後にはアンカーとして、「ハンガリー経済改革の現状と展望」について報告した。とにかく、このエネルギーと能力には恐れいった次第である。このセミナーの座長の任は岡田裕之本学経営学部教授が引き受けられ、討論者には先の久保庭・佐藤・斎藤の各氏のほか、本学部教授の矢澤修次郎氏が立たれた。このセミナーに提出された報告は、本学日本統計研究所『研究所報No.8』に収録されており、このうちコルナイのものは『世界経済評論』(一九八三年五・六・八月号)に、またコルナイ夫人のものは『季刊現代経済』(一九八三年夏季号)に訳載された。

帰国後、コルナイ博士のアカデミー正会員就任講演がおこなわれた。「官僚的調整と市場的調整」を題する講演は、ポラニイの統合図式を批判的に摂取し、かつ若き日の問題意識をベースにしながら、ハンガリー経済改革の進むべき道を考究したものである。こうした社会哲学的分野にも積極的に自説を展開しているところが、興味深い。とはいえ、彼自身の言によれば、コルナイの主たる経済分析上の課題は、ひとつに不足経済モデルの数学的精緻化であり、いまひとつは『不足の経済学』で定式化された諸仮説の実証的検討である。前者の課題は数学者との共同研究として、後者の課題は実務家・統計家との共同研究として進められている。一九八三年後半と一九八四年一杯は、ミュンヘン大学とプリンストン大学研究所の客員研究員として本国を留守にしているが、この共同研究は中断することなく進行し

ている。

コルナイ博士には、今年五月、科学者に授与される賞として最高のハンガリー国家勲章が授けられた。折しも、また宇沢教授も本年度の文化功労賞を授与されることになった。この誌上を借りて、両氏に受賞のお祝いを申しあげ、今後のいっそうの活躍を期待したい。重ねて、三〇周年記念行事にたいする両氏のご協力に感謝する次第である。

今回のコルナイ博士の招聘によって、伝統的社会主义経済学の世界に大きなショックが与えられた。最後に、このある種のサイアンティフィック・カルチャー・ショックに寄与した文献を整理しておこう。以下のリストは邦文で入手できるコルナイの全著作である。

I 著書

- 一 『反均衡の経済学』日本経済新聞社、一九七五年。
- 二 『反均衡と不足の経済学』日本評論社、一九八三年。

II 論文

- 一 「経済学と心理学」、『経済セミナー』一九八三年三月号。
- 二 「ハンガリー自動車市場における不足の再生産」、『社会労働研究』第二九卷三・四号。
- 三 「『不足の経済学』とは何か」、『エコノミスト』一九八三年三月二九日号。
- 四 「ハンガリー経済改革の現状と展望」、『世界経済評論』一九八三年五、六、八月号。
- 五 「社会主義経済における価格調整と数量調整」、『季刊現代経済』一九八三年夏季号。
- 六 「収斂理論と歴史的現実」、『経済セミナー』一九八三年六月号。

社会学部創設三〇周年記念講演会およびセミナーの報告

- 七 「経済学カテゴリーとしての均衡」、『経済セミナー』一九八三年一月号。
- 八 「官僚的調整と市場的調整」、『エコノミスト』一九八三年十二月一三日号。